

「犬と暮らす」ということ - ハチ公をめぐる哲学断章 -

東京大学大学院人文社会系研究科 哲学研究室

一ノ瀬 正樹

上野英三郎博士とハチ公の物語は、おそらく、人間が犬と暮らすという場合の、ほぼ理想型として、理解されている。スコットランドのポピーなど、類似の物語はあるにせよ、犬と人間が深い深い心の絆で結ばれていることが、言語を介する人間の側からではなく、犬の側から、言語的ではない、実際行動の面から、しかも飼い主であるパートナーの死後に、明示されているとしか理解できない、まことに希有な事例だからである。私たちはこれに素直に感動する。そして、翻って、自分の犬にそれを重ね、自分自身のパートナーへの想いをさらに深くしていく。

ただ、少し内省してみる必要がないわけではない。人間が犬と暮らす、というのは、人間ではなく、犬の側から見たとき、そもそも果たして理想型と言えるのだろうか。犬（あるいはすべてのペット動物）は、自然のまま、人間とは独立に暮らす方が、幸せなのではないか（たとえ寿命は短くなるとしても）。犬を人間の家に取り込み、行動に制限を掛けてしまうのは、道徳的に問題ありなのではないか。第一、犬を飼うことは、ひとえに人間の側からの人為であって、犬が望んだことではないのではないか。手前勝手な束縛なのではないか。まして、パートナーとして迎えながら、飼育放棄や遺棄などしてしまう可能性があるなら、犬と暮らすという、私たちの習慣そのものが、道を踏み外したもののなのではないか。

こうした疑問が少なくとも想像可能である以上、私たちが犬と暮らすとき、おそらくは守るべき規範・道徳が了解されてくる。不自然な束縛を極力与えず、自然に近づくこと、しかしパートナーとして迎えた以上は、その福祉を十分に考慮してあげること、この二つである。これらは動物倫理の基本中の基本である。

ただ、私は、少し違った意見を持っている。もしかしたら、犬たちは、人間と暮らすことを自ら選び、そのことで存続を図っているのではないかと。その圧倒的な魅力で人間を虜にして、自らの種を守っているのではないかと。彼らは、個体というよりも、種としての犬という見地からものを見ることができているのではないかと。だとしたら、私は、彼らの期待に応えたい。犬と暮らすことが習性となった以上、彼らとともに、幸福を追求していきたい。むろん、これは私の断章的希望であって、倫理的疑問が完全に払拭されるわけではない。しかし、原理原則を批判的に検討することと、現実が発生してしまっている事態に対応することとは、次元が異なる。現実には私たちは犬と暮らしている。ならば、そうした条件の中での最善を求めるべきではないか。これは、たとえば、クローン人間を作成することが倫理的に間違っているからといって、すでにクローン人間の乳児が生まれてしまっているという状況のときには、その乳児の人権や福祉をないがしろにはできない、というのと類比的な思考法である。上野博士とハチ公の物語は、現条件の中での最善を示唆する好例である。そして、最善を求めることは、犬と人間双方の、いろいろな場面に良循環的に波及し、犬と共生する私たちの社会の道徳的質を高めてくれると確信する。こうした機会にハチ公物語を反芻し、ピュアな心で、人々、そして動物たちと、接していきたい。